
シンポジウム

子ども虐待の「今」を考える

～日本子ども虐待防止学会にいがた大会を11月に控えて～

Consideration of the Current Situation of Child Neglect and Abuse
 – Toward Niigata Meeting of Japanese Society for Prevention of
 Child Abuse and Neglect in November –

第708回新潟医学会

日時 平成27年7月18日(土) 午後1時から
 会場 新潟大学医学部 有王記念館

司会 齋藤昭彦教授(小児科学)

演者 田中 篤(長岡赤十字病院小児科), 西澤 哲(山梨県立大学人間福祉学部)

1 小児科医として子ども虐待と向き合っ、て、「今」思うこと

田中 篤

長岡赤十字病院小児科

Reflection on My Experience in Dealing with Child Abuse Cases as a Pediatrician

Atsushi TANAKA

Department of Pediatrics, Nagaoka Red Cross Hospital

要 旨

子ども虐待は、近年わが国において、その深刻な実態が明らかになってきており、新潟県内においても例外ではなく近年急増している。筆者らの実態調査により、県内医療機関が重症の虐待事例を多く経験していることが分かり、医療機関としての対応能力の向上と体制作りが急務であった。筆者は事例検討会を立ち上げ、また、県よりの依頼を受けて新潟県支援検討専門会議委員として、児童相談所の虐待事例に対して小児科医の立場からの医学的なコメントや助言を担当してきた。この問題に対する小児科医としての果たすべき役割は多岐にわたっており、積極的な関わりが求められている。

キーワード：子ども虐待, 医療機関, 小児科医

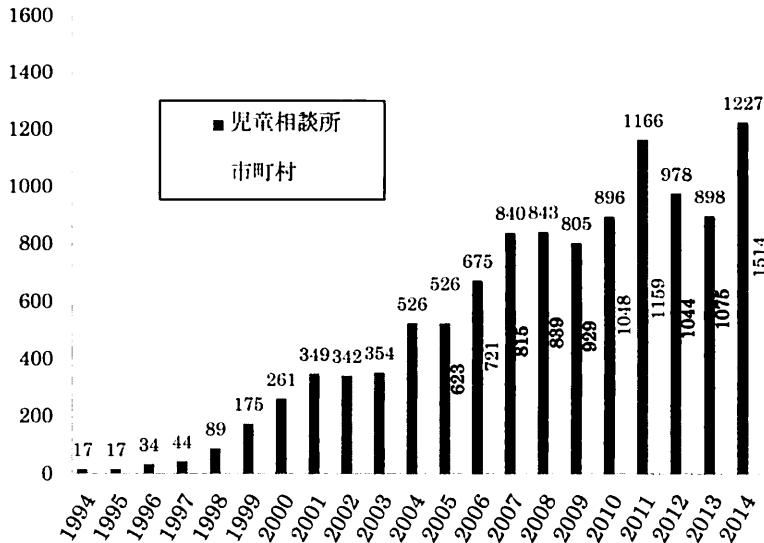


図1 新潟県内児童相談所における児童虐待相談対応件数
2005年からは市町村の相談件数也表示(重複あり)

はじめに

20年～30年前までは、私自身が「子どもへの虐待って、あるのは知っているけれど、自分にはあまり関係がないこと、、、」、「虐待に出会ったら、どうしたらいいのかな?」、「児童相談所はどんなことをどこまでしてくれるところ?」というのが正直な思いであった。その程度の認識だった自分がまさか、日本子ども虐待防止学会の全国大会を、実行委員長として新潟で引き受けることになるうとは思ってもみなかったが、それだけ、この問題の実態が深刻化し、社会全体として取り組むべき問題であるという認識が深まらざるを得なかったということであろう。実際、新潟県内の児童相談所における児童虐待相談対応件数(図1)を見ても、その増加は顕著である。

小児科医としての経験

1981年医師になって1年目、ある新潟県内の地方病院にて、嘔吐を主訴に出会った10歳の女兒が、私にとって思い出せる限り初めての虐待ケー

スであった。十二指腸潰瘍の癒痕狭窄があり、背景に父親による母親への性行為の長年にわたる執拗な強要があった。今であれば、性的DVであり、それをずっと傍らで目撃させられていた女兒は心理的虐待に相当するので、配偶者暴力相談支援センターや児童相談所と連携して対応することになるが、その当時はこのような概念そのものがなく、児童相談所にも連絡をすることはなかった。小児科医としての前半の20年間くらいは、この程度の認識と対応能力しかなかった。

1998年に県庁主催の母子保健福祉指導者研修会において「子どもの虐待防止対策の現状と今後の課題について」というシンポジウムが開催され、シンポジストの一人として参加したことが、この問題に主体的に関わるようになった直接のきっかけである。医療機関としても、この問題に積極的に関わっていく必要があることを実感し、新潟県全体としての体制作りの必要性を感じた。

そのためにも、新潟県内の実態を知る必要があり、1999年新潟県内における医療機関の実態を調査した¹⁾。県内においても、決して少なくない虐待事例が医療機関で経験されていることが分か

り、医療機関としても、この問題に対する関心を高め、対応能力の向上と体制を作ることが急務であると実感した。

1998年12月第1回会合を新潟子ども虐待防止ネットワーク設立準備委員会として開催し、最初は児童精神科医と小児科医、計5名が集まり今後の活動方針について検討した。

2000年4月第7回の会合より、新潟子ども虐待防止研究会に名称を変更し事例検討中心の活動となり、2ヵ月に1回、2～3症例の事例検討を行っていた²⁾。2004年9月までに計30回開催した。参加者は徐々に増加し、小児科医、児童精神科医、法医学者、医師会理事、看護師、助産師、保健師、県庁や保健所、市役所などの行政職員、児童相談所職員、弁護士、家庭裁判所調査官、大学教官など15～30名が出席し、活発な検討が行われた。

新潟県支援検討専門会議委員としての経験

2001年9月から、新潟県は県内の児童相談所における児童虐待の事例に対する対応や方針の検討のために処遇検討専門会議を設置し、医師の立場からの専門的助言を目的に、新潟県から依頼を受けて委員となった。様々な病気に対する医学的な説明、事故か虐待かについての医学的診断、挫傷の発生機序と親の説明の不一致点、医療ネグレクトの可能性と緊急度などについて、医師の立場からの説明や意見を求められてきた。

終わりに

このような経緯で、この問題と向き合っ、私なりに経験し学んできたことから、人間が幼少期から家族関係の中で深く傷つきながら育っていくと、こころと身体にどのような影響を深く受けてしまうのか、どれだけ長い年月その影響下に苦しみ続けなければならないのかということを感じさせられてきた。そして、この問題は、少年犯罪など、社会の様々な問題と根底でつながっている問題であり、人の生き方を根底から深く変えてしまう問題であることが自分なりに理解でき、人間理解がより深まったとも感じている。今では、子ども虐待の問題に関わるようになったことは、小児科医として、人として、よかったと感じている。

2015年11月に予定されている日本子ども虐待防止学会第21回学術集会にいがた大会においては、この問題を多角的な視点から捉え、予防や対策、診断、治療などについて、全国からの多くの参加者ととも考え、答えやヒントを見つけることができる大会にすべく、県内の様々な職種や機関、立場の人から構成される実行委員会で準備を進めている。

文 献

- 1) 佐藤昌子, 田中 篤: 新潟県内の医療機関における小児虐待の実態調査 新潟医学会雑誌 114: 270-276, 2000.
- 2) 田中 篤, 佐藤昌子, 内山 聖: 新潟県内の医療機関における子ども虐待の実態調査と新潟県内での取り組み 日本小児科医会会報 21: 113-116, 2001.

2 子ども虐待：現代社会が直面する課題

西澤 哲

山梨県立大学人間福祉学部